

主要国の野菜の生産動向等

調査情報部

1 中国

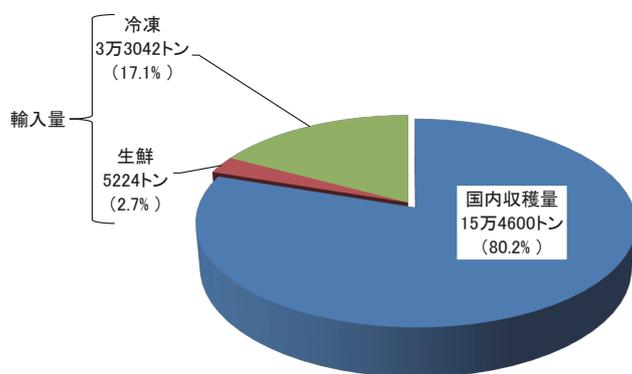
日本が輸入するさといものほとんどが中国産であることから、今月号では、中国のさといもの生産動向等を主産地の山東省を中心に紹介する。

(1) 日本における中国産さといもの位置付け

2016年の日本のさといも供給量の8割は国産品であり、2割弱は輸入冷凍品で、わずかに輸入生鮮品もある(図1)。さと

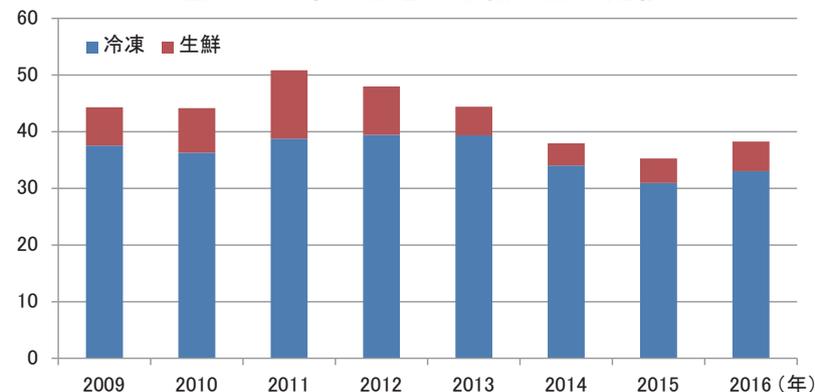
いもの輸入量は、2012年以降減少傾向で推移していたが、2016年は5年ぶりに前年を上回る3万8267トンとなった(図2)。輸入冷凍品、輸入生鮮品ともにほぼ全量が中国産である(表1)。

図1 日本のさといも供給量(2016年)



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」(原資料：財務省「貿易統計」、農林水産省「野菜生産出荷統計」)
注：カッコは全体に占める割合である。

図2 日本のさといも輸入量の推移



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」(原資料：財務省「貿易統計」)

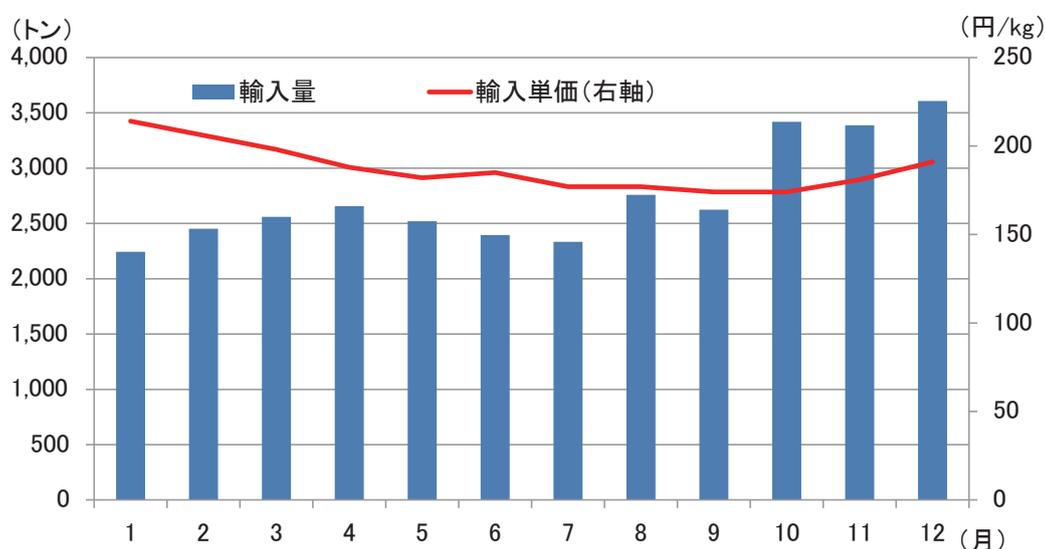
表1 さといもの生鮮・冷凍別国別輸入量（2016年）

（単位：トン）

品目	生鮮さといも			冷凍さといも		
	輸入先国	輸入量	シェア	輸入先国	輸入量	シェア
第1位	中国	5,224	100.0 %	中国	32,956	99.7 %
第2位				ベトナム	37	0.1 %
第3位				インドネシア	28	0.1 %
第4位				台湾	19	0.1 %
—	その他	—	—	その他	2	0.01 %
全輸入量		5,224	100.0 %		33,042	100.0 %

資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

図3 中国産冷凍さといもの月別輸入量および輸入単価（2016年）



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

中国産冷凍さといもの輸入量を月別に見ると、おせち料理などで需要の多い年末に増加する傾向がある（図3）。

本稿中の為替レートは1元=17円（2017年11月末日TTS相場：17.24円）を使用した。

(2) 生産動向

対日輸出用さといもの主要産地は山東省

で、ちんたお青島市やえんたい煙台市などの東部を中心に生産が行われている（図4）。

山東省のさといも栽培は、すべて露地栽培であり、主に4月中旬に植え付け、9月下旬に収穫する（図5）。

注：中国では、大きい行政区分から順に、「省級（省、直轄市など）」、「地級（地級市、自治州など）」、「県級（県、県級市、市轄区など）」などとなっており、青島市と煙台市は地級市である。

図4 山東省のさといも主産地



資料：機構作成

図5 山東省のさといもの生育ステージ

品種	月																																						
	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12					
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下						
萊陽花芋、 石川早生、蝦仔芋																																							

■ : 植え付け ■ : 収穫

資料：聞き取りにより機構作成

注：本図は、植え付け、収穫が最も集中する時期を表しており、それぞれの作業は前後の時期にも実際には行われているとみられる。

近年の山東省におけるさといもの生産動向について見ると、2015年は、前年の価格高騰などから、作付面積および収穫量ともに前年をかなり上回った一方、2016年は、7月末から8月初頭にかけて一部地域

で豪雨が発生したことなどから、単収が低下し、収穫量も前年をかなり下回った。2017年は、全体的に天候に恵まれたことなどから、収穫量は前年を8.3%上回る39万トンと見込まれている（表2）。

表2 山東省のさといもの作付面積、収穫量および単収の推移

年度	作付面積 (千 ha)		収穫量 (千トン)		単収 (トン/10a)	
		前年度比 (増減率)		前年度比 (増減率)		前年度比 (増減率)
2013	12.0	—	330	—	2.8	—
2014	12.7	5.8%	380	15.2%	3.0	7.1%
2015	13.5	6.3%	420	10.5%	3.1	3.3%
2016	12.9	▲ 4.4%	360	▲ 14.3%	2.8	▲ 9.7%
2017	13.0	0.8%	390	8.3%	3.0	7.1%

資料：山東省農業庁種植業管理处への聞き取りを基に機構作成

注：2017年は見込み値である。

(3) 生産コスト

2017年における山東省の10アール当たり生産コストは5558元（9万4486円、2014年比25.2%増）と、2014年に比べ大幅に増加する見込みである（表3）。項目別に見ると、近年の中国の野菜栽培で常

態化している土地代と人件費の増加が見られる一方で、種苗費は大幅に減少する見込みである。種苗費は、主に前年のさといも価格の影響を受け、2017年は2014年に比べ前年のさといも価格が安かったため、大幅な減少となっている。

表3 さといもの10アール当たり生産コスト（山東省煙台市萊陽市）

項目	2014年 (元/10a)		2017年 (元/10a)		2017年/ 2014年比 (増減率)
		円換算 (円/10a)		円換算 (円/10a)	
土地代	1,350	22,950	1,950	33,150	44.4%
種苗費	900	15,300	270	4,590	▲ 70.0%
肥料農薬費	675	11,475	743	12,631	10.1%
資材費	150	2,550	150	2,550	0.0%
農機具費	150	2,550	150	2,550	0.0%
人件費	1,140	19,380	2,220	37,740	94.7%
その他	75	1,275	75	1,275	0.0%
合計	4,440	75,480	5,558	94,486	25.2%

資料：山東省農業庁種植業管理处、萊陽市農業局への聞き取りを基に機構作成

注1：四捨五入や為替換算の関係から、項目間の計算において、誤差が生じることがある。

注2：萊陽市は煙台市の県級市である。

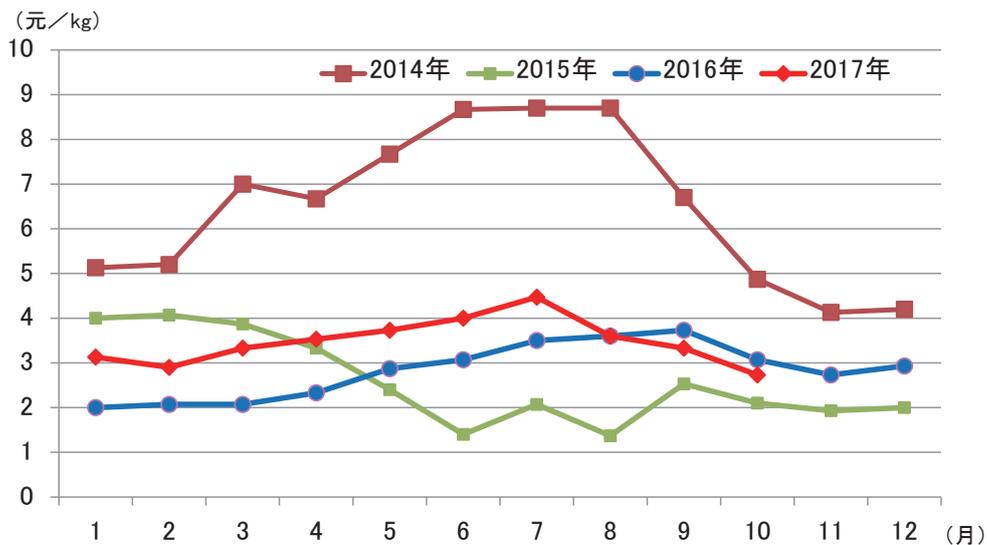
注3：2017年は見込み値である。

(4) 価格動向

山東省のさといも価格は、年ごとに異なる傾向となっている（図6）。2014年は、前年の収穫量の減少に伴い8月にかけて上

昇し、2015年は、それを受けて作付面積、収穫量ともに増加した結果、下落した。2017年は比較的安定しており、収穫が始まる8月以降下落傾向で推移している。

図6 さといもの卸売価格の推移（山東省）



資料：山東青島萊西市東庄頭蔬菜批發市場服務有限公司

(5) 国内向け出荷動向

山東省で収穫されたさといもの8割以上

は、国内に仕向けられている。山東省内に加え、北京や天津などの近郊の大都市や上海などにも供給されている（写真）。



写真 北京市内のスーパーで販売されているさといも（左側）

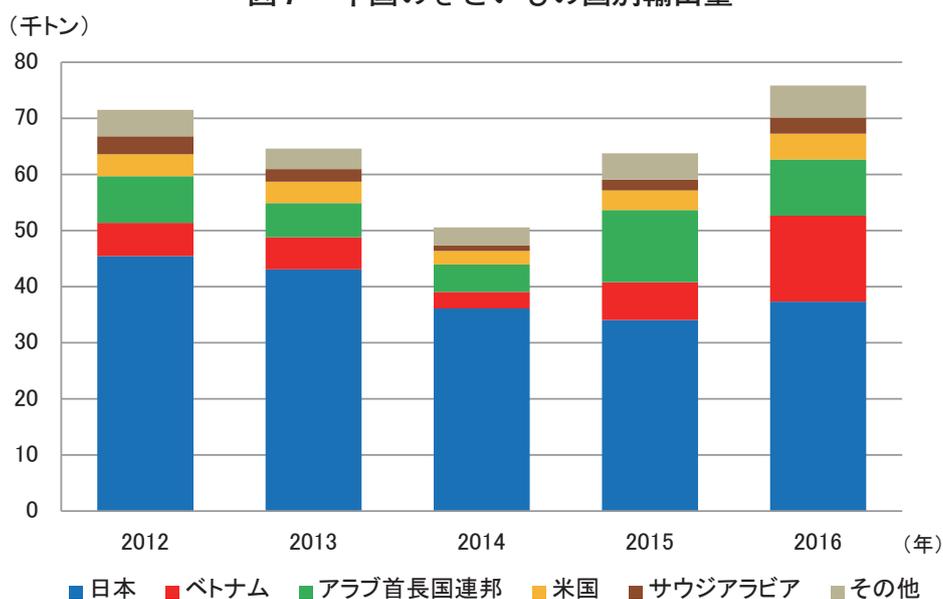
(6) 輸出動向

ここ数年の中国のさといもの輸出量は、一時的に2014年に大幅に減少したものの、基本的には年間6万～7万トン台で推移しており、2016年は前年を18.9%上回る7万5863トンとなった。

国別では、日本向けが最も多い。ただし、

2014年4月以降、人体に影響のある農薬成分の検出を契機に、中国産さといもに対する検査が強化されたことから、日本向け輸出量が減少し、通常の検査体制となった2015年6月以降も回復しきれていない。一部の輸出業者は、ベトナムやアラブ首長国連邦に輸出先をシフトしているとみられる(図7)。

図7 中国のさといもの国別輸出量



資料：中国海関統計

注1：HSコードは07144000。

注2：当HSコードには、こんにゃく製品も含む。

2 米国

米国からは、日本への輸出が多いブロッコリー、レタス、セルリー（セロリ）（以下「セルリー」という）について、それらの主産地であるカリフォルニア州の生産動向などを紹介する。また、トピックスとしてカリフォルニア州におけるブロッコリー生産の概要と2017年の状況を報告する。

(1) ブロッコリー、レタス、セルリーの生産動向

ア ブロッコリー

(ア) 作況および作付面積

カリフォルニア州では9月上旬の40度を超える熱波により収穫量が減少していたが、10月下旬の現地報道によると、品質

には懸念が残るものの、供給量は回復傾向で推移している。11月には、大手生産出荷業者が感謝祭に向けて出荷体制を強化しているとの報道もみられた。

以下、本稿中の為替レートは、1米ドル＝113円（2017年11月末日T T S相場：113.05円）を使用した。

図1 カリフォルニア州の地図



資料：機構作成

(イ) 生産者価格

2017年9月の生鮮ブロッコリーの生産者価格は、同月上旬の熱波を受けて供給量が減少する中、需要は堅調であったことから前年同月比約2.23倍の1キログラム当たり1.81米ドル（205円）となった（表1）。10月は供給量が安定していたため価

格は下落し、同1.5米ドル（170円）前後で推移した。USDAによると、11月9日時点の販売価格は1カートン（14個入り）当たり13.50～15.56米ドル（1キログラム当たり1.30～1.50米ドル：147～170円）であった。

表1 全米の生鮮ブロッコリーの生産者価格

(単位：米ドル/kg)

	2016年				2017年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
生産者価格	0.81	0.83	0.79	0.77	1.23	1.19	1.56	2.11	1.82	1.11	1.12	1.37	1.81

資料：米国農務省全国農業統計局 (USDA/NASS)

(ウ) 対日輸出動向

2017年9月のブロッコリーの対日輸出量は、供給量の減少により前年同月比66.3%減の1221トンであった(表2)。

また、輸出単価は同17.1%高の1キログラム当たり1.30米ドル(147円)であった。

表2 米国産ブロッコリーの対日輸出量および輸出額

(単位：トン、千米ドル、米ドル/kg)

	2016年				2017年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
輸出量	3,628	3,829	3,837	1,696	1,271	1,027	559	723	1,528	1,960	1,295	1,995	1,221
輸出額	4,013	4,574	4,740	2,192	1,676	1,377	797	905	2,234	2,675	1,694	2,517	1,587
単価	1.11	1.19	1.24	1.29	1.32	1.34	1.43	1.25	1.46	1.36	1.31	1.26	1.30

資料：米国農務省海外農業局 (USDA/FAS GATS Database)

(エ) 東京都中央卸売市場の入荷量および価格

2017年9月の東京都中央卸売市場の米国産ブロッコリーの入荷量は、前年同月比36.3%減の102トンであった(表3)。また、卸売価格は、同4.0%安の1キログラ

ム当たり364円であった。なお、同月に同市場で最も入荷量が多かったのは北海道産で、入荷量は同69.3%増の1187トン、卸売価格は米国産を大幅に上回る同445円であった。

表3 東京都中央卸売市場の米国産ブロッコリーの入荷量および平均卸売価格

(単位：トン、円/kg)

	2016年				2017年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
入荷量	160	189	150	143	69	39	41	41	65	90	94	97	102
卸売価格	379	398	351	314	304	319	252	324	340	337	308	340	364

資料：東京都中央卸売市場

イ レタス

(ア) 作況および作付面積

10月下旬の現地報道によると、ロメインレタスの主産地はアリゾナ州に移り始めており、この移行が完了するまで、供給量は不安定に推移する。

結球レタスについては10月中旬、主産地がモンレー郡サリナスからフレスノ郡

ヒューロンへと移ったが、同時期に熱波に襲われたことにより、品質の低下が見られた。

(イ) 生産者価格

2017年9月の結球レタスの生産者価格は、同月上旬の熱波の影響により供給量が減少したことから、前年同月比52.2%高の1キログラム当たり0.70米ドル(79円)

となった（表4）。10月中に堅調だった需要は同月下旬以降、軟調に推移したことから価格は下落し、USDAによると、11月3日時点のサリナスバレー産の結球レタスは、1カートン（24個入り）当たり8.45～10.56ドル（1キログラム当たり0.38～0.47米ドル：約43～53円）であった。なお、同日時点のその他のレタスに関して

は、同地産のロメインレタスが1カートン（24個入り）当たり9.55～10.56ドル（1キログラム当たり0.42～0.46米ドル：約47～52円）、グリーンリーフレタスは、同約12.00～16.00米ドル（同0.53～0.71米ドル：約60～80円）で取引されていた。

表4 全米の結球レタスの生産者価格

（単位：米ドル/kg）

	2016年				2017年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
生産者価格	0.46	0.45	0.59	0.67	0.64	1.13	1.09	1.82	0.58	0.50	0.56	0.54	0.70

資料：米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）

（ウ）対日輸出動向

2017年9月の結球レタスの対日輸出量は、前年同月比約2.2倍の837トンで、輸出単価は同8.0%安の1キログラム当たり1.03米ドル（116円）であった（表5）。

また、結球レタス以外のレタスの対日輸出量は、同76.1%減の12トン、輸出単価は同56.3%高の同3.11米ドル（351円）となった（表6）。

表5 米国産レタスの対日輸出量および輸出額（結球レタス）

（単位：トン、千米ドル、米ドル/kg）

	2016年				2017年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
輸出量	389	458	505	233	150	103	64	65	181	137	279	743	837
輸出額	435	490	531	277	188	111	85	67	178	159	291	710	865
単価	1.12	1.07	1.05	1.19	1.25	1.08	1.34	1.03	0.98	1.16	1.04	0.96	1.03

資料：米国農務省海外農業局（USDA/FAS GATS Database）

表6 米国産レタスの対日輸出量および輸出額（結球レタス以外）

（単位：トン、千米ドル、米ドル/kg）

	2016年				2017年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
輸出量	50	1197	417	78	4	5	75	60	32	1	0	29	12
輸出額	99	2478	899	258	16	18	87	81	30	4	0	85	37
単価	1.99	2.07	2.15	3.31	4.32	3.46	1.16	1.35	0.94	4.00	0.00	2.98	3.11

資料：米国農務省海外農業局（USDA/FAS GATS Database）

（エ）東京都中央卸売市場の入荷量および価格

2017年9月の東京都中央卸売市場の結球レタス以外の米国産レタス（ロメインレ

タス、フリルレタスなど）の入荷量は、前年同月比約13.8倍の5.5トンであった（表7）。また、卸売価格は、同32.1%安の1キログラム当たり351円であった。なお、

同月に同市場で最も入荷量が多かった結球レタス以外のレタスは長野産で、入荷量は

同4.3%減の201トン、卸売価格は米国産を大幅に下回る同242円であった。

表7 東京都中央卸売市場の米国産レタスの入荷量および平均卸売価格（結球レタス以外）

(単位：トン、円/kg)

	2016年				2017年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
入荷量	0.4	1.6	1.6	0.5	0.2	0.5	0.6	—	0.2	0.4	0.2	1.0	5.5
卸売価格	518	239	106	518	518	518	518	—	290	518	119	137	351

資料：東京都中央卸売市場

ウ セルリー

(ア) 作況および作付面積

大手生産出荷業者によると、主要生産地は10月下旬にベンチュラ郡オックスナードへと移行した。11月以降、需要は堅調だが供給量が減っていることから、価格は上昇傾向で推移している。

(イ) 生産者価格

2017年9月のセルリーの生産者価格は、1キログラム当たり0.38米ドル（43円）と、前年同月を8.6%上回った。10月以降は供給減に伴う値上がりが続いており、USDAによると、11月10日時点のサリナス産セルリーの販売価格は、1カートン（24茎）当たり16.15～17.65米ドル（1キログラム当たり0.56～0.64米ドル：63～72円）であった。

表8 全米の生鮮セルリーの生産者価格

(単位：米ドル/kg)

	2016年				2017年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
生産者価格	0.35	0.41	0.59	0.38	0.39	0.34	0.54	0.87	1.76	0.93	0.61	0.39	0.38

資料：米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）

(ウ) 対日輸出動向

2017年9月のセルリーの対日輸出量は、前年同月比37.8%減の371トンで、輸出

単価は同4.5%安の1キログラム当たり0.64米ドル（72円）であった（表9）。

表9 米国産セルリーの対日輸出量および輸出額

(単位：トン、千米ドル、米ドル/kg)

	2016年				2017年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
輸出量	597	620	819	431	696	534	797	554	480	526	486	607	371
輸出額	400	417	625	315	444	340	439	371	469	517	325	397	236
単価	0.67	0.67	0.76	0.73	0.64	0.64	0.55	0.67	0.98	0.98	0.67	0.65	0.64

資料：米国農務省海外農業局（USDA/FAS GATS Database）

(エ) 東京都中央卸売市場の入荷量および価格

2017年9月の東京都中央卸売市場の米国産セルリーの入荷量は前年同月並みの26トンで、卸売価格は前年同月比7.7%高の1キログラム当たり225円であった（表

10）。なお、同月に同市場で最も入荷量が多かったセルリーは長野産で、入荷量は前年同月比11.5%減の653トン、卸売価格は米国産を大幅に上回る同280円であった。

表10 東京都中央卸売市場の米国産セルリーの入荷量および平均卸売価格

(単位：トン、円/kg)

	2016年				2017年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
入荷量	26	32	33	37	27	27	33	32	24	9	23	24	26
卸売価格	209	214	210	212	202	204	204	213	242	398	245	231	225

資料：東京都中央卸売市場

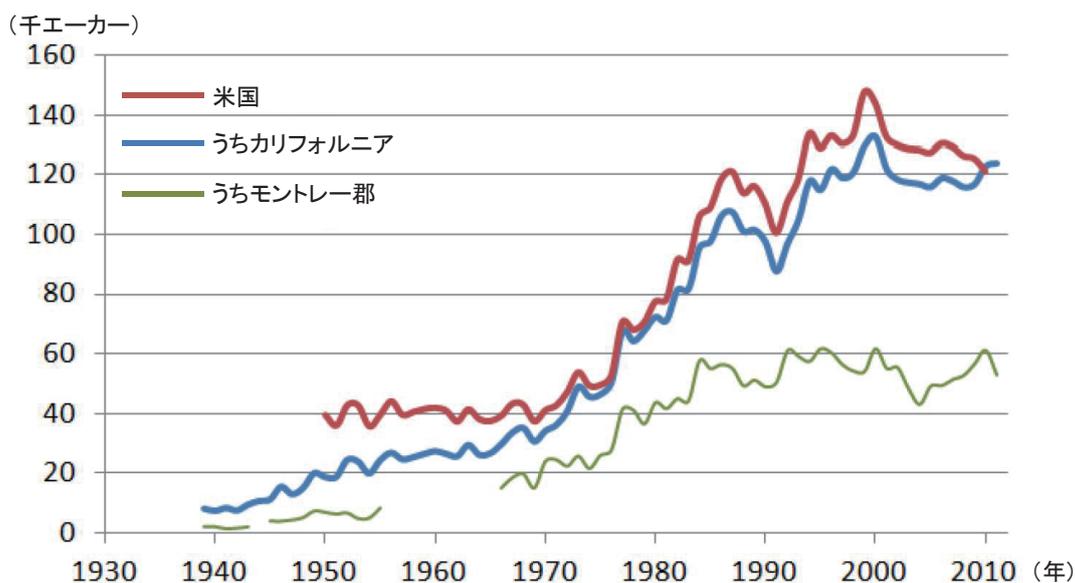
(2) トピックス ～カリフォルニア州におけるブロッコリー 生産の概要と2017年の状況～

ア 概要

カリフォルニア大学デービス校によると、カリフォルニア州におけるブロッコ

リー収穫面積は、2000年代に入ってから約12万エーカー（約4万8562ヘクタール）と、1940年代から10倍以上に増加している。同州産ブロッコリーの全国の収穫量に占める割合は1950年の約50%から1970年代には約90%に増加し、今日でもその水準を維持している。

図2 カリフォルニア州、全米とモンレー郡のブロッコリー収穫面積



資料：UC Davis 「Broccoli Production in California」

主要な生産地は、モンレー郡、サンタバーバラ郡とサンルイスオビスポ郡である。これらの3つの沿岸郡の生産量は、カリフォルニアの約70%、全国のほぼ3分の2を占めている。そのほかの産地としては、フレズノ郡やインペリアル郡が挙げられる。

生産時期や生産方法は地域によって異

なっている（表11）。インペリアル郡や中部沿岸地域では直播じかまきが行われる一方、南部沿岸地域では75%が定植されている。また、州中部では7割が直播で、3割が定植である。定植の場合は、10アール当たり約1万200苗が植えられ、直播の場合は同110～170グラムの種が播種はしゆされる。

表11 地域別ブロッコリーの生産概要

季節	生産時期					生産地
	作付開始	作付完了	収穫開始	収穫最盛期	収穫完了	
冬	12月初旬	2月下旬	1月中旬	1月中旬～2月中旬	3月中旬	インペリアル郡、リバーサイド郡
春	3月初旬	5月下旬	4月中旬	4月下旬～5月下旬	6月中旬	ベンチュラ郡、サンタバーバラ郡、サンルイスオビスポ郡
夏	6月初旬	8月下旬	7月中旬	7月下旬～8月下旬	9月中旬	モンレー郡、サンベニト郡、サンタクルーズ郡
秋	9月初旬	11月下旬	10月中旬	10月下旬～11月下旬	12月中旬	フレズノ郡、カーン郡、スタニスラウス郡

資料：米国農務省全国農業統計局

イ 2017年9月までの生産状況

1月から2月には未曾有の多雨・降雪に見舞われ、播種・定植が遅れたことから生育も遅れていた。3月にも多雨は続き、平年は59日間ある定植日数のうち34日は作業が中止となった。春先の主産地はベンチュラ郡やサンタバーバラ郡であったが、出回りが少ない状態は4月下旬近くまで続いた。

5月初旬には暖かい天候が生育を促進し

たが、5月中旬から6月初めにかけては気温の低下による収穫の鈍化があった。6月下旬にはモンレー郡サリナスバレーでの熱波の影響により、供給量の低下が若干見られたが、品質に影響は及ばなかった。

7月から8月にかけての生産量や質は平年並みだったが、モンレー郡では9月上旬には再度熱波に見舞われ、大幅な質と供給量の低下が見られた。